

我が「セガン研究」総括

川口幸宏

ことの起こり—60歳になる年のある日のこと

2003年5月16日に鳴った電話が、私のそれまでの無為な生活を新しく開くこととなった。

1980年代半ば以降の私は教育学研究者としての社会的信用と地位とを失っていた。いろいろと申し開きすることはあるにしても、事実として、あらゆる研究組織とも実質的に縁を切られていたからだ。そのような研究的に無聊をかこつ日々を送る中で鳴り響いた電話の受話器の向こうは、出身大学・大学院の大先輩にして、埼玉大学勤務時代の同僚教授、かつ我が教育界の革新的傑人と目され、私自身も心から尊敬していたS埼玉大学名誉教授であった。大学院生時代に同氏からいただいた指導語「歴史研究というのは先人の歩いた道を重ね歩き、その上で独自の道を切り開くものなのです」は、今でも、私の教育史研究の中核的な指針となっている。

電話は、氏が講師を務めている市民講座『エミール』の催し〔『エミール』・セガン・21世紀平和への旅〕へ私が参加申し込みをしていたことに対し、この旅は講座受講生のための企画なので一般参加は原則的に無いのだが、講師推薦枠定員内の人間として私を推薦してくださる、というのが主旨であった。S氏は続けて、定年退職を記念して最終講義はすませたが、退職記念著作の企画がありあらかた完了しているが、氏が40年間続けてきた生涯的研究課題の「セガン」について、そのフランス時代の諸事が不明なことが多くあり、それを満たさなければ課題は終わらないので呻吟している、という苦衷を吐露された。

この時に氏からいただいた「セガン」情報は、「セガンは、フランスで生まれ、医学博士号を持つ医師を務めながら、当時『人間』として認められていなかった『白痴』を『人間だ』と認め、その教育と研究に生きた先駆的な人である。共和主義者であったが故にアメリカに亡命せざるを得ず、後の半生をアメリカで過ごしている。ヴィクトル・ユゴーとも交流があったという。セガン家とロマン・ロラン家とは交流があった。」ということであった。電話をいただいた数日後、フランス語大辞典ロベールで「セガン」の項を検索。次のようにある。

「セガン (エドゥアール オネジム)、アメリカの教育者ならびに医師、フランス出身 (1812年クラムシー生まれ—1880年ニューヨークで没す)。イタールおよびエスキロールに師事。セガンは、1839年パリに、知能の発達遅れた子どものための初めての教育施設を創設した。後のヨーロッパやアメリカの知的障害児学校の原型である。1850年、セガンはアメリカに渡る。彼は、知的発達遅れのある子どもたちに、著作『白痴のための精神療法、衛生ならびに教育』

(1846年)において述べた教育方法を実践した。セガンの教育方法はP. ピネルの精神療法から着想を得ている。活動は、あらゆる対象の関係と同じように個々人の相互の関係において、個人の発達に基盤となる。とりわけ触覚、視覚、聴覚の感覚器官の活動は、遊戯や運動によって体系的に促進される。セガンによれば、その活動が知的能力を増大させるからだという。この考え方はM.モンテッソリーに継承されていく。」

名前はかすかに知っていたが、この時初めて、その略歴・業績を文字で目にした。無聊をかこつ日々人間の頭にはさっぱり収まらない内容であった。しかし、何かしら、私にもあるのかもしれない研究者魂を呼び覚ましてもいい対象なのかなと惹かれるものがあった。事実、S氏から次から次へと出される調査依頼に、無理だ、方法論そのものが分からない、とうめきながらも、パリ在住のKさん(当時:パリ第5大学生、現:日本の大学講師、教育社会学博士)に、協力をいただきたいと依頼のメールや電話を度重ね、かすかにつかみえた情報をS氏にファックスでお送りする毎日が続くことになった。

ひょっとして、「想」が事実であるとしてしまっているのか。

S先生のセガン研究40年の総括研究書『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』(全4巻、日本図書センター、2004年)の各巻にはグラビアページがある。S先生は膨大な収集資料の中から自薦で、多数の資料をグラビアページに収録したいというご希望を強くお持ちになっていた。どう考えても版元が同意するはずはない。いつの間にやら同書の編集の責を任せられるがごとくの扱いをされていた私は、各巻グラビアのタイトルを定め、それにふさわしい資料をそれぞれの枠に収録するプランを作成し、先生に提案した。もろもろの考案のもとに、グラビアページは「口絵作成 瀬田康司」と明記された。

グラビアの構成は、例えば、第1巻で見れば、

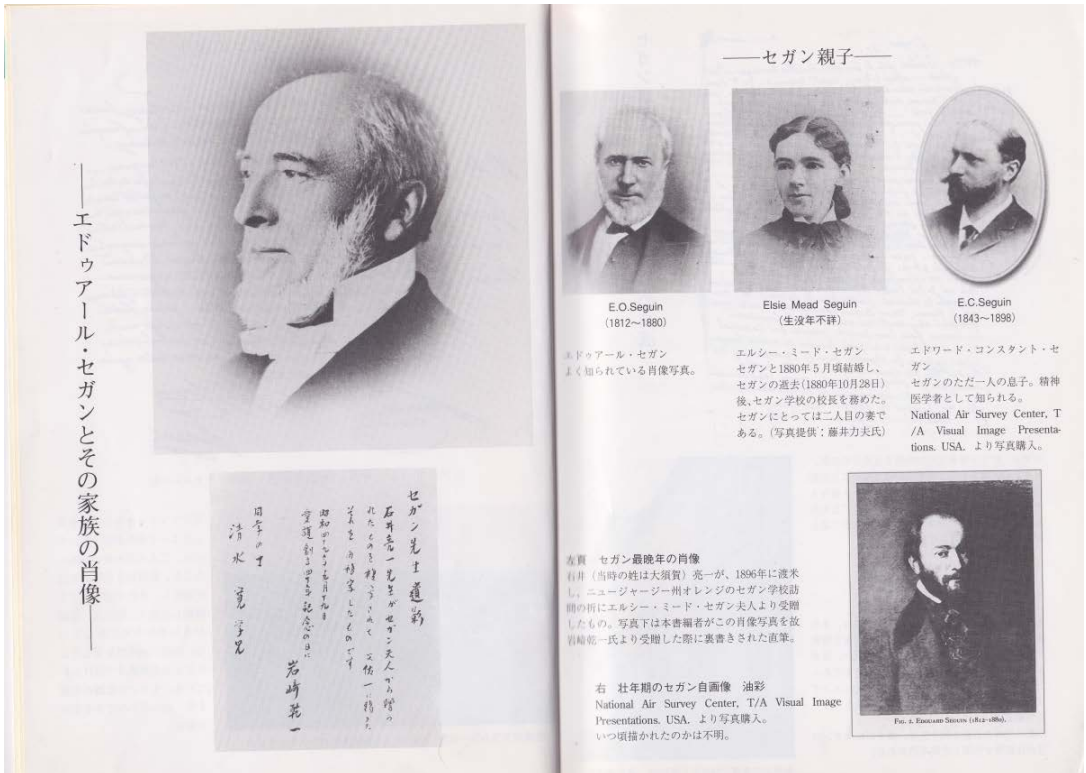
第1ページタイトル: エドゥアール・セガンの誕生

第2, 3ページタイトル: エドゥアール・セガンとその家族の肖像

第4ページタイトル: セガン家とロマン・ロラン家との交流

という具合である。この時点ですでに、先生と私との間で、セガンの生育史・諸活動理解に相容れないことがらが多々あったが、この書物はあくまでも先生の「セガン研究40年」の到達を示すものであることから、私はS先生理解による生育史・諸活動理解に基づいて、グラビア作成をした。

さて、第2, 3 ページに着目したい。



右ページ下の画像に対するキャプション「右 壮年期のセガン自画像 油彩」、あとは写真版で購入した旨と購入先とが綴られている。このモノクロ写真を「油彩」だと判断された根拠は何にあるのだろう。また「自画像」とする根拠は？

2003年11月のある日、先生が「セガンの写真が見つかりました。S大の図書館の司書がインターネットで見つけてくださったのですが、使用料が1万円いるとのことで、これから振り込みに行きます。」とニコニコ顔で語ってくださった。その際、このように言われたのだ。「これはセガンの自画像です。ぼくは絵をやるので分かるのですが、こうやって少し斜に構えるのは、右手に絵筆を持って自分を鏡に映して、それを描くからなのですよ。」と。この時は、私は、パリ・コミュニケーション学習の中で写真の開発・技術史を学んだことの成果として、写真のポーズの取り方というのは個性の表現でもあるけれど、時代や社会の制約も反映しており、もしこの写真が1850年頃ののだとすると、その頃の写真は、やっとなグネシウムを炊いて写すことが可能になったころでしかなく、一般的には、被写体はかなりの時間、静止していなければならない、そのことと関係するのだろう、多くが斜に構えているのが残されている、と先生に進言することを止めたのだった。せつかく貴重な写真を手に入れて喜んでいることに、水を差したくなか

ったから。一時の興奮が言わせてたのだろうと思ったのだが、グラビア用の原稿として提出されるとは！後の代までこの情報は、先行研究の一つの到達として残ることになるのだが…。

それにしても、このポートレートは、何を意味しているのだろう。そういう課題が私には残り、また、S先生の、私に対するセガン入門案内で発せられるセガン評価の言葉の「質」は丹念に吟味しなければならないな、と思わずにはおられなくなるきっかけともなった。

じつは、2007年夏、この写真と同一のものを、アメリカ合衆国の Disability History Museum (DHM) のデジタル・サービスで見つけることができていた。次のような情報が付加されている。

TITLE: Edouard Seguin

DATE: 1850

FORMAT: Photograph

FORMAT TYPE: Photo engraving

DIMENSIONS: 5 x 8 in (Image size 401×549pixels)

SOURCE: National Library of Medicine, Prints and Photographs

CONTROL NO.: B023426

原版所有はアメリカ合衆国立医学図書館(National Library of Medicine)であるということ、そして驚くべきことは、写真が1850年作成のものである、ということである。1850年といえば、セガンがアメリカに移住した年だと、私は推定していたのだが、それじゃ、源泉は、パスポート?! 残念ながら、これだけの情報では、パスポート写真だとは断定できない。それにしても大学図書館司書氏もいい加減な情報を先生に提供したものだ。たしかに司書氏がネットでデータ検索の結果ヒットしたセガン写真の提供機関は使用料請求をクレジットしているが、丹念に検索していれば、自由閲覧(自由ダウンロード)の Disability History Museum に行き着き、さらに「自画像 油彩」などという「想」を生み出させないようなデータ [キャプション] に行き着いたはずなのだから。徹底して史料クリティークをなさいね、と、ひ弱い大学院生の私に電話口の向こうで強い口調の指導を下したのは、ほかならぬ S先生なのだが。

くだんの写真が、セガンのパスポート写真であることが確定的にわかったのは、2012年10月28日、29日に、セガン生誕の地ニエヴル県クラムシーで開催された、セガン生誕200周年記念国際シンポジウムにおいてであった。基調報告的研究報告をしたフランスの医学博士が、セガンがアメリカに渡ったのはパスポート申請書類によって1850年であると確定できる、と報告し、アメリカのフランス語教師でアメリカにおけるセガンの研究をしている教師が、パス

ポート写真とパスポート写真を元にして描かれたセガン肖像画〔油彩画！〕を会場に展示していたことで、誰にも疑われることのないセガン・ポートレート写真だと確定されたのである。肖像画の方は油彩画ではあるが自画像ではない、セガンが渡米後に著名な画家に描かせたと説明を受けた。当時、王侯・貴族は言うまでもなく、著名な知識人やブルジョアジーの間では、その地位の証として、肖像画を画家に描かせるのが流行している。やがて、肖像画を描かせるには多額の金銭がいり、写真技術も格段の発達を遂げるようになったため、肖像写真を撮り自分の存在証明とするという時代がやってくるのだが。アメリカに渡ったセガンもそういう人たちの仲間入りをした（あるいはしたい）という意識が芽生えたのだろうか。この肖像油彩画は、今次の翻訳書『初稿 知的障害教育論—白痴の衛生と教育』（セガン原著。幻戯書房、2016年）のグラビア・トップページを飾っている。



たった一枚の写真の確定に 10 年もかかった。それもかなりの部分において他力本願ではある。「ぼくは絵を描くからわかる」というような「想」で歴史は語るようなものではない、語れるようなものではないと、強く思う次第である。

以上、S 先生に象徴させて語ってきたが、先生に固有の問題なのではなく、1960 年代に我が国にセガン研究を興し、教育学や関係諸科学・諸機関に影響を与えてきたセガン諸研究は、セガンの歴史的偉大さという大規定を説明するために、あれこれの「事実」を作り上げてきた。あれこれの「史実」を組み合わせると歴史的な偉大さになる、という論理展開ではない。まさに「想」の歴史観である。

「想」史観からどう脱却するか？

(1) S 氏から調査依頼を受けたのはセガンの前半生、すなわちフランスからアメリカに脱する(亡命する? 移住する?)までの、フランス時代の生活・社会活動史に関わることが主体だった。「白痴教育」に関わることはといえば、セガンが初めて白痴教育に取り組みその成果が高く評価された対象児童—アドレアン・H—の家族関係(両親の氏名等)および家族の居住地調査のみであった。後は自明のことだったということになる。

(閑話休題)

先生が本気になって私の調査能力をあてにしていたとは、今も思わない。思いつきでしかない、と言ってよいだろう。私へのセガン研究入門を意識されていたのかもしれない。むしろ私も、すべてすべて、本気になって調査項目に挙げるということはしなかった。方法論も分からなければ具体も分からないものを、調べようはないからである。アドリアン家族の件はその典型である。関係史料としては、セガンが残した実践記録パンフレット一冊があるのみであるのだから。

それでも私は、彼がパリ児童病院（当時名「病弱者施療院」）の入院児童であったとする故中野善達氏の論述（2004年刊の前掲S氏編著書に収録されている中野氏の論文）に従って、その当時の入退院児童名簿のありかを求めて、同病院を訪ねている。2005年3月のことだ。幸いなことに、この時に応対してくれた同病院副院長が、パリの医療・福祉に関する史料はパリ医療・福祉古文書館（パリ4区AP/HP古文書館）に保管されている、入退院児童・入院死亡児童の名簿もアーカイヴ化されて保存されている、あなたが閲覧する便宜を図ってくれるよう連絡を入れておく、と、「飛び込み」の訪問であったにもかかわらず、親切を見せてくれた。

パリ医療・福祉古文書館における調査の結果分かったことは、中野善達氏はまったく根拠のない情報をしたり顔で（断定口調で）論文に書いていたのだった。アドリアンの教育についての相談をセガンの師イタールにもちかけたのが児童病院の院長（第2代、ゲルサン）であった、というセガンの記述から、アドリアンが児童病院の入院児童であった、と〈断定〉したわけである。氏にはそういう「前科」が少なくない。その典型書は1960年刊行の中野善達訳『エドゥアール・セガン 知能障害児の教育』（福村出版）である。

S氏らセガン研究を興した人々にとって中野善達氏は、その語学力でもってセガン関係の諸史料をいち早く日本語に転換つまり翻訳紹介をする、水先案内人のような役割を果たした方だが、同氏のばらまくセガン情報は多くがガセネタであることが、追跡調査の結果、明らかとなり、また翻訳も誤りが多い。中野氏の記述をあてにしたセガン研究はすべて疑ってかかってよい、とさえ思う。先生は、ある意味、その犠牲者なのだろう。もっともその責の元は先生自身が負わなければならないのだけれど。

話を元に戻すー

方法論も具体も分からない調査項目を除けば、セガンについて回想的に語っているアメリカの「友人」たちによるセガンの葬儀の際の弔辞やセガンの死を報じる新聞記事等（1880年10

月)が、先生たちの主たる情報源であって、先生たちのオリジナル史料収集に基づく情報ではないことに、すぐ気づいた。私は、弔辞というものは、どのような人間であっても最大限に祭り上げるものだという観念の持ち主だから(偏見?)、話半分に読んだのだが、先生たちは、弔辞内容を史実として捉え、論文に綴っている。従って、白痴教育の開拓者セガンは、その家族関係から始まり、学習史、交遊歴、知的精神的社会的存在などなど、超越的卓抜的人格者として綴られていた。これらすべてを虚偽・虚飾だとは考えないにしても、先生のお教えに従えば、「先人の歩んだ道を重ね歩く」研究的手続きは、当然のこと、必要となるはずなのだが……。

これらの調査活動は必然的に「現地入り」調査を導き、「当事史料」の発掘作業を導く。これらの調査活動は、『知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究』(新日本出版社、2010年)以降の著書・論文にまとめた。セガン研究の先人が「弔辞」などを拠り所として「史実」特定し、歴史評価していることが、どれほどに誤ったセガン研究を導いてきたか、繰り返して言うまでもあるまい。有り体にいえば、先生らは、「先人の歩いた道を重ね歩」くことなど、何もなさないで、「セガン研究40年」という冠をつけて語っておられるのだ。

今振り返ってみると、先に触れたパリ児童病院訪問の瞬間が、私のセガン研究に、「白痴教育」に関わる実証的研究をもたらせることに繋がっていったように思われる。前記2010年新日本出版刊行の著書の第三章は、こうして、記述の契機を得たわけなのだが、S氏は、残念ながらとあえて言うが、私の研究が「白痴教育史」解明に礎石を置いた事実を見逃しているのか、無視しているのか、新聞書評(『しんぶん赤旗』2010年5月9日掲載記事)でのその関係の扱いは非常につれないものがあつた。「孤立から社会化へ」という視点でセガンの私的・公的イデオロギイの足跡を克明にたどっている。」ただこれだけである。これまでのセガン研究の到達をひっくり返しているというのに。脱線ついでに、この「公式評価」に強い悲しみを覚え、2014年著書『19世紀フランスにおける教育のための戦い—セガン—パリ・コミュニケーション』(幻戯書房)を著し—この著書では「白痴教育」実践過程そのものと、セガンが「白痴教育史」に果たした歴史的意義に焦点をあてて論じた—、そして今回の翻訳書の上梓にエネルギーを注いだ次第である。

(2)ところで、こうした調査活動の中で、それまで通説とされていた「史実」が史料発掘によって別の「史実」に書き換えざるを得なくなったことが、多々ある。

その一つ、セガンの学歴に関して、「医学校」(「医学部」)で学んだ(その後、「医学博士」となり「医師」となった)というのがセガンの白痴教育開拓の強いバックグラウンドとして語られてきたが、私は、セガンの学籍調査の中で、彼は1830年に「法学部」に学籍登録をしてい

るのを知った。2005年3月の現地調査でのことである。さあ、「法学部」は白痴教育開拓のバックグラウンドになり得るのか。さっそく先生にこの旨をお知らせした。先生はためらうことなく「それはセガンが人権に目覚めたからです。」と応じられた。

「人権に目覚めた云々」の応酬は、セガンにおける数年後の白痴教育への道の開拓とサン＝シモン主義者となった、という事実から演繹したと思われる。とても分かりやすい論理だが、歴史評価としては誤りを多く含んでいる。あるいは、セガンをある種、不可侵的存在だとみなしている先生にしてみれば「そうであってほしい」という願いの表出であったのかもしれない。しかし、19世紀前半のフランスの史実という視点を据えれば、とてもじゃないが、無理のある応酬である。「想」がセガン虚像を作り上げていると、思わざるを得なかった。

第1に、この時代の「法学部」は、ナポレオンI世の実学主義教育改革の目玉の一つであり、人権という思想哲学とは無縁の法律処理術修得の場として、古典法学主義の場「法学校」を改組して創設されたものである。修了してもせいぜい法廷弁護士（基礎的教養として弁論術は要求されるが近代的人権思想は要求されない）か地方自治体の中間役人の職、あるいは新興産業のサラリーマンぐらいなものしかその進路はなかった。「フランス革命」におけるかの人権宣言からイメージすることは甚だ危険である。「フランス革命」後、フランス社会はどれほどの政体を変え、どれほど抑圧と殺戮を繰り返してきているか。

なお、セガンは学籍簿上で理解できることは、法学部を修了していない。にもかかわらず、1841年の妹の結婚にあたっての立会人宣誓署名に「弁護士」との肩書をつけている。明らかに虚偽なのだが、ほかにも、医学部で学び博士号を取得などしていないにもかかわらず、白痴教育に取り組み始めた初期には医学博士と肩書きをつけた公的証書が残っている。このように、虚偽を語っている史料が残っていることからみて、セガンは、公的証書にさえ虚偽を通す強い性癖の持ち主であったとも判断できるのだが、この件に関しては、十分な調査・考察をすることができていない。心残りではある。ただ、今回の翻訳書の注解においてその一事実のみを紹介しておいた（p.165 下段注解109）。

第2に、サン＝シモン主義者セガンにかかわる評価問題である。これは私も陥った、ある種、歴史評価の落とし穴である。少し長くなるが、以下、述べることにしたい。

セガンはその著『白痴、ならびにその生理学的方法による療育』（1866年）において、セガンの同時代の教育動向を、1. 王侯貴族のための教育、2. ブルジョアジーの要求にこたえるための教育、そして、3. 最も劣りかつ最も哀れな人々のための教育、の3類型を挙げ、サン＝シモン学派が第3の教育に尽くした、旨のことを綴っている。英米文学者による訳本も出さ

れており、セガン研究者はこぞって、第3類型に言う「最も劣りかつ最も哀れな人々」すなわち「白痴」のための教育にサン=シモン学派が力を尽くしたと理解した。そして、それは「あらゆる手段と制度によって、とりわけ無償教育によって」（邦訳書訳文より）為された、というのである。ただ、サン=シモン主義者の組織体が白痴教育のあれこれを構想し、手掛けたということを示す史料は、発掘されていない。従って、セガンが言う「サン=シモン学派」とは、セガン自身を指している、と考えられる。それほどに、セガンにとっては「サン=シモン主義」が彼のアイデンティティとなっていた、と言えるだろう。

我が国に知られているサン=シモン主義は「空想的社会主義」であり、マルクス主義のような科学性のある見通しを持った、理論的に成熟した社会思想ではない、ということである。セガンはこのサン=シモン主義の立場にあったわけだが、それでは、彼の白痴教育は、未成熟であったにせよ、社会主義的社会解放と結びつけられていたのか、という問いが持たれ、肯定的に理解して、セガンの論理を読み取る努力がなされ続けてきた。しかも、そのようなサン=シモン主義の枠をセガンは潜り抜け、さらに進歩・発展させようとしていただろう、とも理解されていた。

私は私で、19世紀フランスのさまざまな革命に内在する論理を得たかったから、セガンの1866年著書の著述内容にはたいそう心ひかれた。そして、1848年2月革命にいたる過程のサン=シモン主義者たちの動向に視点を当てて、彼らの社会変革への戦いの姿を追いかけた。「冬の時代」と呼ばれる言論・運動への弾圧が激しい中で、サン=シモン主義者の間から「コミュニズム」の概念が創出され、また、秘密結社・家族協会が結成されるが、そのメンバーには多くサン=シモン主義者たちが参加している。家族協会の綱領には、人権の確立を訴え、社会的弱者の救済を訴え、無償義務教育の確立を訴えるなどが目につく項目としてあった。そして幾度も政治的弾圧を受けている。私は、逮捕されたメンバーの裁判記録から、セガンがその中にはいないかどうかを調べた。あわせて、労働・社会運動史事典という大部の書籍でも、セガンについて調べた。それらの結果については2010年の著書第2章において述べているが、セガンは社会変革を望み活動する人物であるとの確信を得た。この活動が、セガンを、1848年革命の渦中で、共和主義者としての活躍に結びつけさせていることも確認できた。これは、あらゆるセガン研究では成し遂げることができなかった研究成果であり、高く評価されもした。くだんの先生からは「第二章は、本書の白眉である。」と高いお褒めの言葉もいただいている。

しかし、すべてのセガン研究において、そう私のそれも含めて、セガンがサン=シモン主義者であり、サン=シモン教徒であることは述べていても、それが白痴教育の具体とどう結びつ

いているのかは、誰も指摘することは無かった。ただ、私を弁解する意味で述べると、セガンの白痴教育にかかわる記録書・論文はきちんとは読んでいなかったから、実践的關係性について理解しようがなかったわけである。私はセガンの白痴教育実践そのものに分け入った研究をする意図が全くなかったことが、そのような姿勢を取らせていた。

そもそも「あらゆる手段と制度によって、とりわけ無償教育によって」する白痴教育の具体はどのようなことなのか、という問いさえ持つことは無かった。いくつかのセガン研究あるいは回想証言で、セガンは、白痴たちの養育のために文学などを綴って（また、さまざまな仕事をして）その費用を賄った、とするものがあるが、それをもって「無償教育」だった、というのではないだろうとは考えもした。セガンの言う「無償教育」は制度理念であり、個人の実行を言い表す概念ではないはずなのだから。

それでも、2005年以降、少しずつ紐解き始めたセガンの白痴教育実践過程が具体になるにつれて、つまり、私教育→（公認私立学校設立による）公教育→医療現場における（公称）「白痴の教師」としての治療的教育という実践過程があったことを知るにつれて、次第に疑問が強くなってきた。「あらゆる手段と制度によって、とりわけ無償教育によって」とは？この原文は英語であるが、セガンの実践がフランス時代に行われている限り、彼は同主旨の文をフランス語で書き残しているはずだ、と考え、初期体系論文「白痴の衛生と教育」（1843年論文）—今度上梓した翻訳書の原典—を中野善達訳書（前記）とともに通読した。しかし、「あらゆる手段と制度によって、とりわけ無償教育によって」と訳しうるフランス語原文には行き当たることができなかった。

だが、「無償教育」と訳された英語は **free education** である。これは教育学ではテクニカルターム扱いになっており、「自由な教育」と訳すると罰点をいただいてしまう。余談だが、セガンに初めて触れたころそのような訳をし、先生がやんわりと諭すように「無償教育」という語を提出されたことが強烈に印象に残っている。

セガンの1843年論文では、（フランス語で）**une éducation liberale**（自由な教育）は強く主張されている。考えてみると、セガンは、初等庶民教育については言及することがないが（おそらく、その組織的教育は出発したばかりであり未成熟であったこと、セガン自身が経験していないことから、普遍化することができなかったのだろう）、自らの被体験を元に、当時の寄宿制中等教育つまりコレージュなどを厳しく批判している。各種コレージュ等の中等教育の学校に見られる伝統的な教育方法つまり体罰、記憶・暗記主義、画一的な集団管理、抑圧……それらは子どもを悪しくする、と。そうした伝統に縛られることなく、子どもに生得的に内在す

る意欲や資質・能力に応じた自由な教育が必要だ、とも強調しているのである。

セガンの主張の眼目は、制度論なのではなく、宗教的哲学に裏付けられた実践論だ。そう理解して、改めて 1866 年著書の該当箇所を読み直すと、非常に重要な文言の読み飛ばしをしていることに気づいた。同時代の教育状況の第 3 について、このように言っていたのだ！

「キリスト教学派（サン＝シモン主義）は福音書の諸原理を現実に応用する努力を積み重ねた。あらゆる手段・施設を通じて、最も劣りかつ最も哀れな人々を速やかに向上させようとするものであり、ほとんどすべてが free education によるものであった。」

私は、マルクス主義思想の洗礼を受けており、「宗教」は社会建設のらち外において考える習癖を身につけている。そのために、サン＝シモン主義がキリスト教社会主義の系譜にあること、それはすなわちセガンがキリスト教的社会主義を基にして実践を図っていたということを考慮せず、マルクス主義への一里塚として短絡的に捉えてきたのだと、強く自己批判せざるを得ない、重要なセガン認識問題（誤認！）なのであった。セガンがサン＝シモン主義「家族」に加わった際（1831 年）に教育を受けた際の使用テキストは、彼自身の語りを汲み取れば、サン＝シモンの遺著『新キリスト教』であり、ドイツ啓蒙主義者レッシング著『人類の教育』その他であったようだ。それらは以降のセガンの論文・著書にたびたび引用されている。それらのテキストを紐解いてみると、すべて問答方式に綴られている。キリスト教入門書『教義用問答書』そのものを思わせる。形式が宗教教育（教義教育）であるし、内容も「啓示」を聞くことに結びついている。そして何よりも、神がすべてを治める（神の許ですべての存在がある）、さらに、教育は啓示を具体的に実現する方法である、との論理も知ることができる。これを普遍的にとらえれば、「白痴」もまた神による被造物であり、神の啓示を受ける存在である、ということになる。この一点こそ、セガンの白痴教育の本質部なのではないか、と考えられた。

（3）前記にかかわってくる問題として、セガンの「人間 homme」概念の検討はどうしても必要になってくる。

先生が私へのセガン案内で、「人間としてみなされていなかった時代に、セガンは、白痴を人間だとみなし、教育に取り組んだのです。」と言われた。「最後の最後まで人間扱いがされてこなかった白痴、それは現代でもその傾向がみられる、といっても過言ではない。そういう白痴をいち早く人間だと理解し、人間が人間たるにふさわしい教育を受ける権利を認めた」というのがご案内いただいた趣旨である。セガンの先駆者としての面目を語るに、これに過ぎる内容はないと思われた。

強く共感を覚えながらも、私の頭は、もう一方、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのフラ

ンス社会における「人間」観に思いを寄せてもいた。それは、「フランス社会の一員」としての「人間」のことであり、普遍的存在としての「人間」のことではない。19世紀半ばを過ぎて起こった歴史事象パリ・コミューンにかかわる史料収集をし若干の考察をしていた私にとって、フランス近代とはどういう社会だったのかについて考察せざるを得なかったのだが、そのもっともな問題点はフランス社会の植民地主義の性格であった。力で圧殺し、人的資源物的資源自然資源総てを略奪する近世的な植民地主義は過ぎ去り、植民地を啓蒙する政策へと転換が図られていた。そのために「異文化の地・植民地」をどのようにして同文化に質的転換を図るかの研究は、国家的な事業とされた。なかでも植民地住民の「同化 civilization」は大きな課題であり、「人間観察家協会」などが組織され、医学、言語学、地理学、文化人類学等々の観点から、「事例研究」がなされていた。ありていに言えば、可能性も含めて植民地のフランス化である。そのためにもっともふさわしい研究材料はルソーの言う「良き野生人」であり、それを原点としてフランス化＝「市民形成」を試みることである。フランス化が可能である存在を「人間」とみなしており、そうでない存在は棄民システムに收容し、終生そこで生かさず殺さずの扱いとともに、医学実験の対象とされた。棄民システムには、精神病者、重度の障害者、重犯罪人、末期病者、寄る辺無き高齢者が收容された。セガン研究にかかわって言えば、白痴、痴愚、癲癇などが收容された。誰も彼らを「人間」とは呼ばない。しかし、軽度の症例者は疑似人間扱いがされ、労働他文化的な能力の形成が試みられていた。私にとって、この問題の好個な例がかの「アヴェロンの野生児」である。

「白痴の衛生と教育」（1843年）論文に、ずばり、セガンが描いているのを見出した。盲者や聾啞者が社会と交わる文化（盲者は線文字や点字を、聾啞者は身振り言語）を習得したことによって「社会化」の可能性が広がり、「彼らは人間になった」と。つまり、セガンは、盲や聾啞のままでは「人間ではない」とみなしていたのである。そして「人間でない」とみなされる最後の「階級」が白痴である。セガンの白痴教育の出発点はそこにこそあったのだ。セガンにとって、盲、聾啞、白痴の「人間化」の根本的な方法は医学的治療であるとの認識なのだが、医学がそこまで進んでいない時代・社会では教育が代わって「人間化」を進める、という。

私は、セガン研究の初期過程で、教育の働きを「文明化〔同化〕」と「文化化（発達）」とに二分し、どちらかという、セガンは「文化化」の立場にある、と仮説し、勢いを借りて学習院大学文学部年報に連載を始めた。セガンの師イタールとの対比研究を試みたのである。イタールを「文明化」の立場に置いて考えを巡らせた。しかし、すぐに行き詰った。確かにイタールは「文明化」研究のための組織「人間観察家協会」と密接な関係にあったのだが、ヴィクト

ールの教育に見るべき成果が見られないにしても、「彼は彼自身の前と比較されなければならない」という言葉を残している。つまり、社会に有用な存在者になるまでの成果は見せないけれど、彼の中で変わっていることを確かに見いだせる、ということだ。これは今日の「発達」観にもつながる重要な気づきなのである。

一方セガンはどうか。セガンの白痴教育の眼目は社会化、つまり労働による社会参加にあった。端的に言えば「文明化」を以て教育の成果とした。この教育の成果がうまく実らない子どもに対しては、家族に愛されるようになることを以てよしとする。白痴であるが故に家族からさえ疎んじられていた過去を持つ子どもが、家族に愛されるようになる、厳しい評価をすれば、「社会化」には至らない子どもを迎えるのは「社会」ではなく「家族」でしかない。時代的未成熟だとはいえ、これが限界だったと評せざるを得ないだろう。

なお、セガンの白痴教育実践をその目で確かめたベロームは、「セガン氏の教育は極めて優れたものであり感嘆に値する。しかし、白痴が普通の子並みになるということはありません。」と参観の記録に綴っている。ベロームは、いち早く、多数の白痴の観察によって「白痴は教育によって発達する」と医学博士論文の主題にまとめた人である（1824年）。つまり、ベロームによれば、白痴は教育によって発達はするが「社会化」はできない、という立場にあった。セガンの白痴教育の本質は教育による白痴の「社会化」であったから、セガンと当時の医学博士たちとの白痴教育の在り方、成果の求め方には大きな開きがあったといえよう。

ちなみに、これらの問題は、今日においてさえ、未解決である。

おわりに

セガンの実践の一つに、「梯子の昇り降り」の訓練がある。これはもちろん、トビの例の芸を養成するためではなく、四肢の発達、握りの訓練等に資するためにある。記録を読むたびに、セガンのすさまじいエネルギーを感じることができ、私の好みとする実践である。

「私は彼らを、石工の梯子の後ろを、脚と腕を使って登らせました。一方で私自身は前から登り、私の手を彼らの手に押しつけました。全員が間違いなく梯子から落ちるので、それを防ぐためです。このゆっくりとした、つらい梯子登りで、ジャックマンは、私の手の下にあった自分の手を無理矢理解放し、地面に降り、その労苦からの釈放を求めて、私に向かって十字を切りましたし、マルキは、梯子の棧を掴んだ後、おぞましい叫び声を上げて、わめき立てて怒り、逃げ去りました。ポンサールは激しく抵抗しました。私の手に負えないので、

彼の意のままにしておきます。グルダンは、あらゆる指導から逃れようと、サルのように素早くいくつもの横木をよじ登りますが、不用意に(気が急きすぎて)、繰り返し梯子から落ち、口に拳を突っ込みながら、起き上がります。ラミは1段登り手を下ろす、あるいは、その反対、です。上の方を目指した規則的な運動をやり遂げさせることは不可能です。他の者たちは、つねに、同じ足と同じ手で登ります。オーギュストとラングロアは初めから登り降りしました。……」(1842年)

梯子の昇り降りの訓練を終えた後、セガンは子どもたちにリンゴを持たせる。これは何のために行うのか、ということ。先生は、子どもたちに「偉かったねー、これはご褒美だよ。」と言って渡すのだ、とおっしゃる。セガンは、リンゴは梯子の握り訓練で手のひらと指にマメができるほどの活動によって熱くなった手を冷ます役を果たす、手を冷まさないと次の活動へ導入するのが難しい、とは書いている。少なくとも、セガンを代表する二つの著書、1846年著書(フランス語)と、1866年著書(英語)にはその旨を書いている。しかし、先生の言う「偉かったねー云々」は書いていない。リンゴ以外でも丸く冷たい果物ならば構わない、とは書いているが。

書いている、書いていないの論議は、事実を確かめるのが簡単である。しかし、それにとどまらない「問題」を含んでいると、私は捉えている。先生は、セガンの「内言」を聞き取ろうとしている、私は「外言」のみでセガンを理解しようとしている、ということだ。私は、できの悪い研究者だから[私の主観ではなく、大学院の指導教授や職場の同僚たちにそう言われ続けてきたから]、文書等視覚聴覚触覚で確認できる直接資料(感覚資料)以外を道具として研究することはできない。つまり、研究対象に思いを重ねることはできない。研究対象の内なる声を聞き取ることはできないのである。

こうして、旧来のセガン研究者を強く意識しながら進めてきたセガン研究だったが、私の研究を頭から読もうとしないお方もいらっしゃるし、ただただ沈黙を保つだけの方もいらっしゃる。きちんと語学の基礎から学んでいない者の言うことなど貸す耳は持たない、とあからさまなことばで対応された方もいらっしゃる。私のセガン研究は、案外、孤独感を連れ歩くものであった。(2016年2月22日記)